HONTAMA
本魂
ワイズ出版
〒160-0023　東京都新宿区西新宿 7-7-23-7 F
TEL・03-3369-9218　FAX・03-3369-1436　www.wides-web.com

9月の新刊
伊福部昭 語る
伊福部昭・著／小林淳・編
（文庫判／六八〇頁／定価一五〇〇＋税）

『伊福部昭 語る』の著者
小林淳さんに聞く

聞き手
浦崎浩實

――「伊福部昭　綴る」（5月刊）の編者で「伊福部昭　語る」（8月刊予定）の著者、小林淳さんに伺います。淳はジュンじゃなく、アツシとお読みするんですね。ご本名ですか？　小林秀雄と江藤淳（じゅん）にあやかった筆名かな、と（笑）。

小林　ええ、本名なんですよ。平凡な名前なので、得するときと損するときがありますね。まあ、単純にいえば目立ちたいときは損、逆のときは得だ、みたいな（笑）。小林秀雄と江藤淳にあやかったペンネームだったら文才に恵まれたでしょうから、よかったんですが。

――「伊福部昭　語る」では、膨大な作品について、伊福部さんは語られていますが、たいへんなお時間がかかったでしょうね。

小林　私が伊福部さんにインタビューを始めたのは、伊福部さんが映画音楽の現場に復帰されたドキュメンタリー映画の『土俗の乱声』からなんです。あれが一九九一年ですから、もう二十年以上も前になりますね。「キネマ旬報」の仕事でした。親しくしていた「キネマ旬報」の編集者が、小林に伊福部さんを取材させてやろう、と頁を作ってくれたんです。ありがたいお話でした。

　それから伊福部さんは東宝のゴジラ映画音楽に戻ってこられて、平成「ゴジラ」シリーズを4本担当されました。その時も、これは東宝が作るムックの仕事でしたが、それぞれの映画でロング・インタビューをさせていただきました。こういう仕事が土台になり、その後、CDや東宝のLDなどで過去の映画のお話を聞かせていただくという仕事の過程を経て、私の初めての著書となった「伊福部昭の音楽」に至っていくわけです。そうした流れの中で、伊福部さんに今までやってこられた映画のお話を聞かせていただく機会が増えていったんですね。

――ずっと接してこられて、伊福部さんの人となりを、教えて下さい。

小林　もちろん私にとっての憧れの存在、偉大な方ですから、いつも緊張感を抱きながら取材しました。伊福部さんにインタビューした方ならみなさん、頷かれると思いますが、こちらの拙い質問にも真剣に耳を傾けてくださいますし、答えてくださるので、気は抜けなかったですね。真面目で誠実な方でした。伊福部さんは、時にユーモラスな言い方をなさるんですよ。これは文に起こしてもなかなか味は伝わりませんね。やっぱりいろいろなところに話が飛ぶんですね。当たり前でもありますが。多くが、今までに担当してきた映画の話題、映画人のことや当時の録音時の思い出などでした。これが、私にはすこぶるおもしろかったし、貴重な証言でした。やはり日本映画の歴史の証言者のおひとりだと実感しました。

――伊福部昭は小林さんにとって、常に立ち返る〝原点〟と思っていいですか？（そこまで、群を抜いて小林さんを惹きつけるものは？）

小林　そうかもしれません。幼い頃から、伊福部さんの映画音楽、主にSF特撮怪獣映画ですが、それらを観て育ってきた世代ですから。でも、なにも伊福部音楽ばかりを追ってきたわけでもないんです。通常の映画マニアでした。外国映画、日本映画を問わず。私が映画音楽に目覚めたのは、当時、映画館で観てきた映画を反芻する手立てが、数冊の映画雑誌、プログラム、ポスターぐらいしかなかった中、映画のサントラ盤が大きな存在感を放っていたからです。当時、ラジオで映画音楽がよく流れていたんですよ。それをカセットに録音し、プログラムを眺めながらよく聴いていました。そうして映画を回想して楽しむ。そんな日々を送っていました。そうした体験が根っこにあるような気がします。なので、特定の作曲家、伊福部さんの音楽をいつも意識していたわけではなかったんです。でも、私が20代になるか、ならないときに、初めて伊福部さんの映画音楽のLPレコードが出た。これを買って聴いたときに、実感したわけです。ああ、これが自分の原点であり、血であるんだ、と。このときの血の昂ぶりは今でも忘れられません。ですので、うまくは表現できませんが、そうしたものが今現在の活動の源になっている気は自分でもしています。ノスタルジー、懐古趣味とも違うんですね、明らかに。このへんは、話をしていると、他の伊福部研究者の方々も大なり小なり同じですね。ああ、あなたもそんな流れで、というのが意外なほど多い。

　まあ、逆にいえば、そこまで受け手を虜にする力、伊福部さんが作る音楽にはそれが間違いなくあった、ということでしょうね。

――音楽という抽象的なものを、文字に移すご苦心を伺えますか？

小林　ある意味、これが一番の問題、課題ですね。自分自身、本や雑誌に書かれた文章を読んで、そこから音楽そのものが聞こえてきた、という体験がほとんどないんです。先達の方や著名な音楽評論家の先生の文章でも、音楽自体が直線的に聞こえてきた、という記憶がほとんどない。ドレミファ、とか並べたもの以外に。ですから、これは何とも自分でも答えようがないと申しますか……。

　ひとつ心がけているのが、既成の楽曲を出して、「～のような」とか「～みたいな」というのはなるべく避けようと。いや、やっているかもしれませんね（笑）。まあ、自分なりに何とか伝えようと考えて、真摯に対処しているつもりではありますが、これは読者の方々の評価に委ねる以外にないと思っています。

――総譜（スコア）との参照など、大変なお仕事ですよね。読譜など音楽的なことはどこで学ばれたのですか？　小林さんの経歴に記されていないもので（笑）。

小林　前のご質問にも関係するのですが、私はどこかで音楽を勉強してきた人間ではありません。大学もなぜか経済学部ですし（笑）。編集の専門学校にも行っていた。だからどこかの音楽学校に通って、という経験はありません。あえていえば独学となるでしょうし、いい方を換えれば、我流となるんでしょうね。

　ただ、こういう人間でも音楽を語ることは不可能ではないとも思っているんです。（▼裏面へ）

映画書籍の古典

ワイズ出版映画文庫

ワイズ出版映画文庫①

完本 石井輝男映画魂　石井輝男／福間健二・著

日本映画異端の巨匠・石井輝男。奇想溢れる石井映画の世界を福間健二によるインタビューと、詳細フィルモグラフィで集成。
文庫判／六八八頁／一五七五円

ワイズ出版映画文庫②

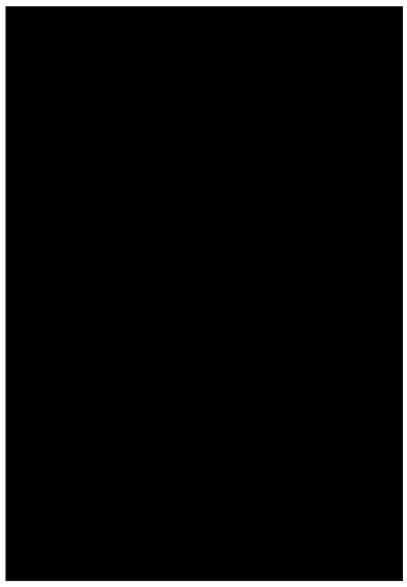
映画的な、あまりに映画的な　マキノ雅弘の世界　山田宏一・著

粋でお洒落で面白い……。映画の神様・マキノ雅弘監督の世界を、映画評論家・山田宏一が映画の言葉で語りつくす。
文庫判／四二四頁／一二六〇円

ワイズ出版映画文庫③

沢島忠全仕事　ボンゆっくり落ちやいね　澤島忠・著

斬新な演出法を駆使して時代劇に革命を起こし、『人生劇場　飛車角』では東映任侠映画の嚆矢となった沢島忠の集大成本。
文庫判／六五六頁／一五七五円



9月の新刊

ワイズ出版映画文庫④

加藤泰映画華
―抒情と情念―

加藤泰・著／鈴村たけし・編

（文庫判／六八〇頁／定価一五〇〇＋税）

〝やさしさと憤怒の名匠〟と称され、時代劇や任侠映画で活躍した加藤泰監督。ローアングル、長廻し、フィックス、シンクロ（同時録音）など独特の技法を駆使し、〝男と女の映画〟を撮り続け、没後３０年近くを経て、その声価はますます高まるばかりです。

本書は１９９５年に刊行された単行本「加藤泰映画華」を、文庫化にあたり全面的にリニューアルして、その映画世界の全貌に迫ったものです。

内容は、加藤泰の残した全文章からその映画鑑賞に役立つものを厳選したエッセイ集成、映画作法の核心に迫るインタビュー、そして劇場用映画４２本（テレビ映画１本を含む）の詳細なデータ、加藤泰本人による自作解説、さまざまな関係者の証言、豊富な資料を駆使した作品解析などを満載し、〝加藤美学〟の本質に肉迫します。

まさに加藤泰ファンのみならず、日本映画愛好家にとって必携の書といえる貴重な内容を、ハンディな文庫版にてお届けします。

（▼表面の続き）伝わる、伝わらない、正しい、正しくない、というのは別として。特殊な才能を持った方々だけが音楽を語れるというわけでもないとも思っているんです。音楽も、いってみれば受け手が存在して初めて成立する大衆芸術でしょうから、こういうやり方もアリではないかな、と。ただ、もっともっと勉強しなくてはダメですね。これは自戒しております。

――小林さんのご著書は〝巨星〟シリーズなど書名から拝察すると巨匠主義のようですが？（笑）

小林　私はなにも巨匠主義者ではないんですよ。巨匠、名匠だから効果的な映画音楽が書けるというわけでもありませんから。語り始めるならまずは巨匠たちからだろう、という程度のものです。それ以外に思惑はありません。

いや、でも、〝巨星〟シリーズにおいては、正直申し上げて、巨匠なら企画は成立しやすいだろう、いくら音楽ファン、映画ファンに知られていても、一般的ネームバリューに弱い方はちょっとむずかしいだろう、というような打算は少しありました。ですので、仕事の内容は〝巨星〟と比べても決してひけを取るわけではないのに、結果的に無名というレッテルを貼られたためにいまだ脚光をあてられない作曲家というのも少なくはないわけです。戦後日本映画の歴史を眺めれば。そうした作曲家たちに対しても、何かアクションを起こしていきたいですね。

――日本映画音楽でこれら〝巨星〟を次ぐのはどなたなのか？　小林さんの認識を、こっそり、教えてくれません？

小林　〝巨星〟シリーズは、自分としては完結させたつもりはないんです。実は、次に取り上げる作曲家の方々も決めていたんですよ。その中、取材をさせていただくお約束をしていた複数の方、松村禎三や池野成さんが私の準備が遅れたこともあってお亡くなりになってしまい、さらに、ご存命の方でも、取材はどうも、あまり記憶も鮮明でないし、と断ってこられる方もいらしたりして、ちょっと棚上げムードがなんとなく出てしまい、そのままになっています。鏑木創さん、渡辺宙明さん、津島利章さんもぜひ追わせていただきたい作曲家です。いつか実現したいと思っています。ワイズ出版さんがGOサインを出してくださるかどうかは、まったくわかりませんが（笑）。

◎他社の名著・快著

▼２０１２年度キネマ旬報映画本ベストテン（5月上旬号発表）の第1位は、山田宏一著・平凡社刊「トリュフォーの手紙」。04年に選出が始まって以来、05年度と、09年度から連続4回1位で、歴代最多の5度も1位。同業者のクレディビリティ（信用）を得る厳しさを思うと、壮挙であり偉業。▼矢田部英正「美貌の文化史-神とアイドル」（中公文庫）は古からＡＫＢまでの美貌史を論じた文庫書下ろし。しぐさ研究の著者らしく、映画「東京物語」（53）の記述がひときわ胸を打つ。それこそ、話の構えだけ拝借した「東京家族」（13）にスポイルされたもの。▼木村隆「演劇人の本音」（早川書房）は演劇・映画人、作家ら24人との興趣溢れる対談集。▼長部日出雄「新編　天才監督・木下恵介」は8年ぶりの増補版で、版元も新潮社から論創社へ。名著はかく甦る！▼立花珠樹「あのころ、映画があった-外国映画名作１００本への心の旅」（言視舎）は〝心〟の素直な表白がまぶしい。他社の快著に負けてなるかよ、ワイズ出版！

◎追悼

▼「よみがえる歌声」の帯にコメントを下さった田端義夫さんが4月25日に亡くなりました。謹んで哀悼の意を表します。

◎Special　Thanks

▼ワイズ出版刊行書特別フェアが、神戸・海文堂書店（２０１２年6月）と、神保町・書店グランデ（２０１３年2、3月）で開催、好評を得ました。▼林家たけ平「よみがえる歌声-昭和歌謡黄金時代」がＴＢＳラジオ「大沢悠里のゆうゆうワイド」（5月10日放送）で、著者出演で紹介されました。▼三遊亭萬橘「落語家-五代目円楽一門会生態録二〇一三」が「東京かわら版」3月号で著者インタビューとともに紹介されました。また、「週刊新潮」7月4日号の「読書万巻」で、立川談四楼師匠に書評をいただきました。▼浦崎浩實「歿2　映画人墓参抄」が以下の紙誌に著者インタビュー、他で紹介されました。東京新聞、山形新聞、千葉日報、信濃毎日新聞、岐阜新聞、京都新聞、神戸新聞、山陽新聞、熊本日日新聞、沖縄タイムス（2度）、八重山日報、八重山毎日新聞、シナリオ誌、キネマ旬報。▼伊福部昭「伊福部昭　綴る」が、北海道新聞6月30日の●で作曲家の南聡氏に書評をいただきました。

（7月●日現在）